

# 心的内容の不確定性の問題 再検討

勝亦 佑磨 (Yuma Katsumata)

東京大学

本ワークショップの目的は、心の哲学や知覚の哲学における「心的内容の不確定性の問題」に関して、各提題者のそれぞれの立場から解決策を提示し、検討することである。一般に、私たちの心的状態の多くは、ある状態を表象し、そうした表象内容を持つと考えられる。例えば目の前にハエがいるという知覚は、「目の前にハエがいること」を表象し、「目の前にハエがいること」という表象内容（あるいは心的内容ないし内容）を持つと考えられる。こうした心的状態の内容を説明する心の哲学のある立場に、目的論的機能主義が挙げられる。目的論的機能主義とは、心的状態を、生物の心臓や肺のように「生存に有益な」機能を持つ生物学的状態として捉える立場である。主流な見解によれば、こうした心的状態を生み出す形成機構（生産者）とその心的状態に基づいて行動を引き起こす利用機構（消費者）は、それぞれの機能を持つために祖先の生存に役立ち、それゆえに進化の過程で選択され、現在においても存続している。このようにして選択されてきた生物の器官や特性の持つ機能は目的論的機能と呼ばれ、目的論的機能主義の論者はこうした目的論的機能によって心的状態の持つ内容を説明するのである。ところが、こうした目的論的機能主義による説明では、心的内容が一義的に確定しないという点で、不確定性の問題が生じる。

こうした心的内容の不確定性の問題への解決は、次のような点において議論の余地がある。例えば、表象の生産者と消費者のどちらをより重視するのかという点において、目的論的機能主義は立場が大きく二分される。また、目的論的機能主義の主流な立場は進化に基づく表象論を支持するが、進化よりもむしろ学習に基づく表象論を重視する立場もある。

さらに、心的内容の不確定性の問題は、次のような点においても議論の余地がある。例えば、人間とは異なる認知能力を持つ動物は、人間と同じ概念を持っているとはいえ、それゆえ言語による心的内容の記述の確定は不可能ではないかという問題がある。また一方で、心的内容の不確定性が本当に問題になるのかという議論もできるだろう。というのも、多少の不確定性があったところで、その内容の違いが行動の産出と関わらないならば、行動の説明や予測にとって大きな問題は生じないと考えられるからである。本ワークショップでは、心的内容の不確定性の問題に関して以上のような点を検討したい。